

2011年3月26日

大震災 三歳の孫が「パパと三人でなきゃイヤだ」と...

県内に住む親しい知人から昨日手紙が届いた。そのなかに、東日本大震災に関する「わが家」の近況が記されていた。報道されないが、ここにも確かな“家族の絆”がある。無数に存在するであろう“ひとの絆”を想像する。私たちができる支援のひとつである。

【手紙からの抜粋】

..... 次男が水戸市内に住んでいます、放射能から逃れて、妻と息子（孫）をわが家に避難させようかという話が持ち上がっています。

私は「いつでも遠慮しないでどうぞ」と言っているのですが、三歳の孫が「パパと三人でなきゃイヤだ」と。奥さんも「夫一人、水戸に残して、生涯の別れになったら...と思うと、決心がつかない」と。日に何度も余震がある水戸に住んでいると、“えっ...そんなこと”と私は思うけれど、現実には最悪を考えるというのです。もう、ホントに天災と共に人災に腹が立ちます。

今は極力外に出ないようにして暮らしているそうですが、どうしても住めなくなってきたら、息子が何と言おうと、こちらにいらっしゃいと話しました。

見えない放射能の恐怖に人々をさらしている原発推進派は、どうやって責任を取るのか、とろうとしているのか（していないのか）。ふりまいてきた安全神話を撤回して謝ってほしいです。

わが家のあるこのあたりは、水もおいしく、近くで摘んだツクシが食べられ、申し訳ないほど有難いです。それではまた。 3月24日

[ 追記 ]

知人に電話でホームページ掲載の可否を訊くと、快諾の返事。同時に、手紙では表現されていなかった現地の事情が返ってきた。

知人は時間があれば地元の市議会傍聴にも行き、住民のひとりとして声を届けている、活力ある女性である。知人がもつ優しさつつよさを、父母の姿をとおして、孫も引き継いでいくのであろう。

山口 正

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~tadas/>